

天地を翔けろ



シナリオ・編集 帰家圭吾
まんが 石田らいと
タイトル題字 座主有香

目関図

馬氏



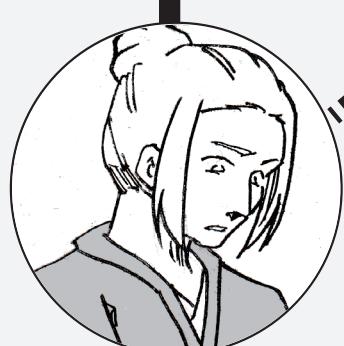
えま ときもり
江馬時盛

親子

兄弟



えま てるもり
江馬輝盛



えま のぶもり
江馬信盛

懇意

人質

武田氏



たけだしんげん
武田信玄

家臣



おぶ さぶろうひょうえのじょう
飯富三郎兵衛尉
やまがたまさかげ
(山県昌景)

懇意

上杉氏



うえすぎけんしん
上杉謙信

ライバル

人物木

三木氏



みつきよりつな

三木自綱

あねがこうじよりつな

(姉小路頼綱)

家臣



うしまるちかまさ

牛丸親正

江馬

兄弟

あそや なおもり

麻生野直盛

親子



あそや よしもり

麻生野慶盛

江

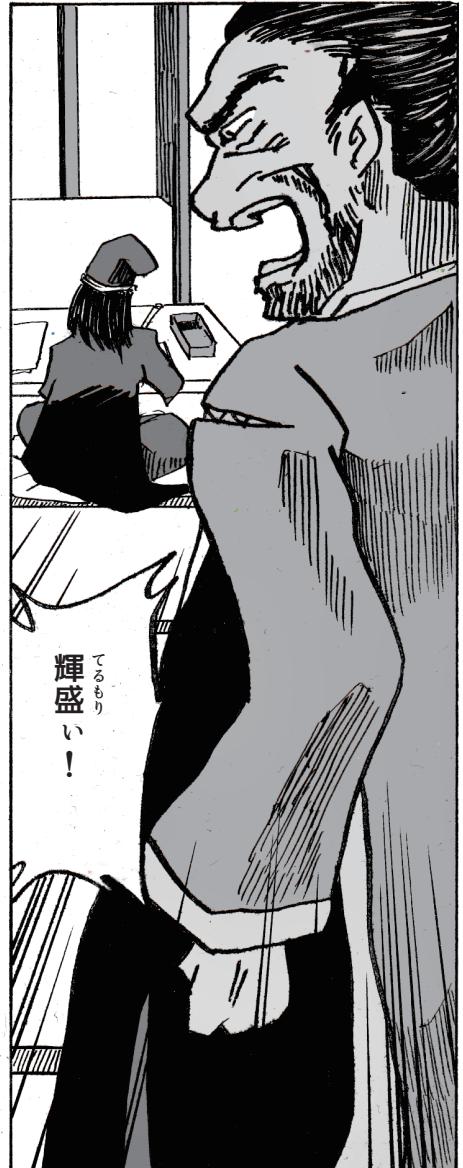
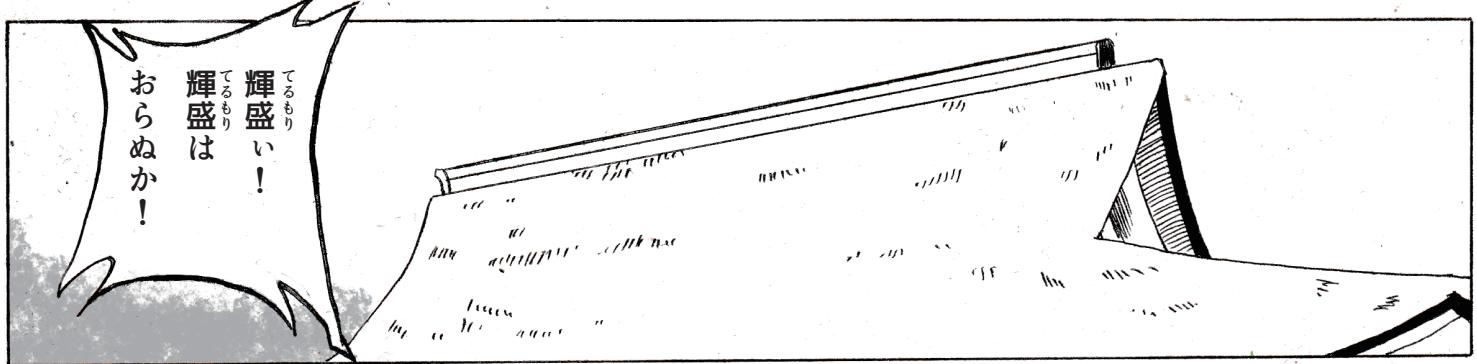
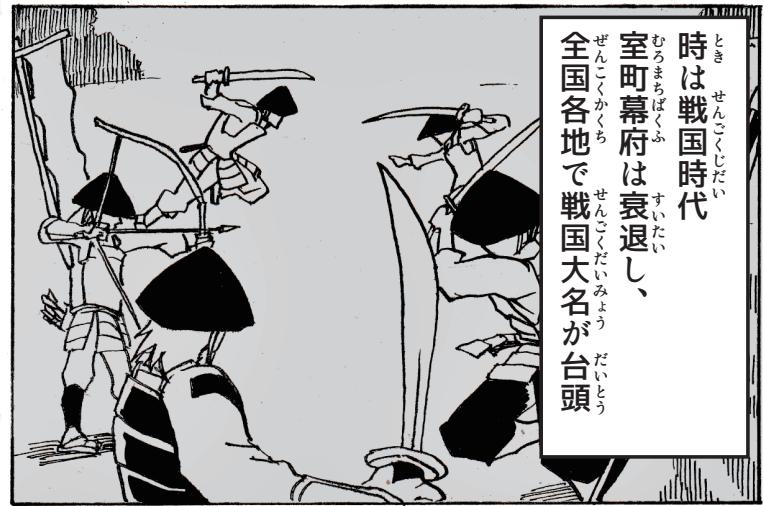
同盟

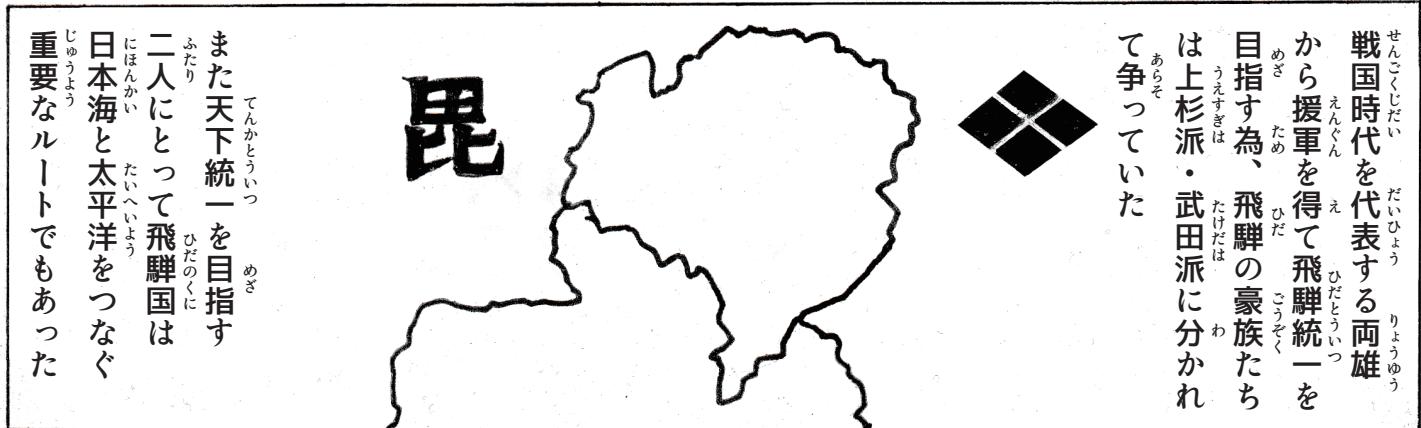
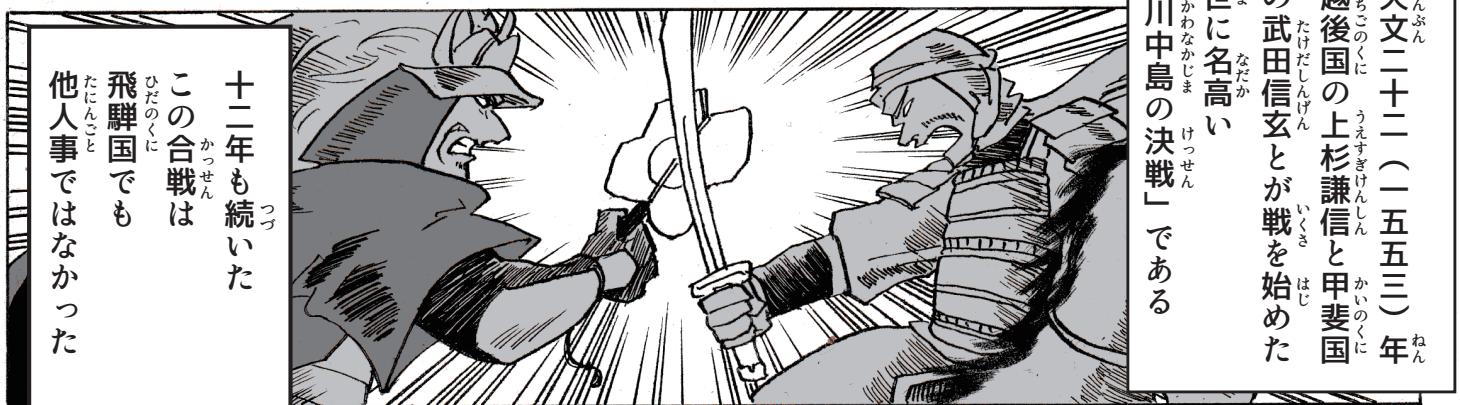
織田氏



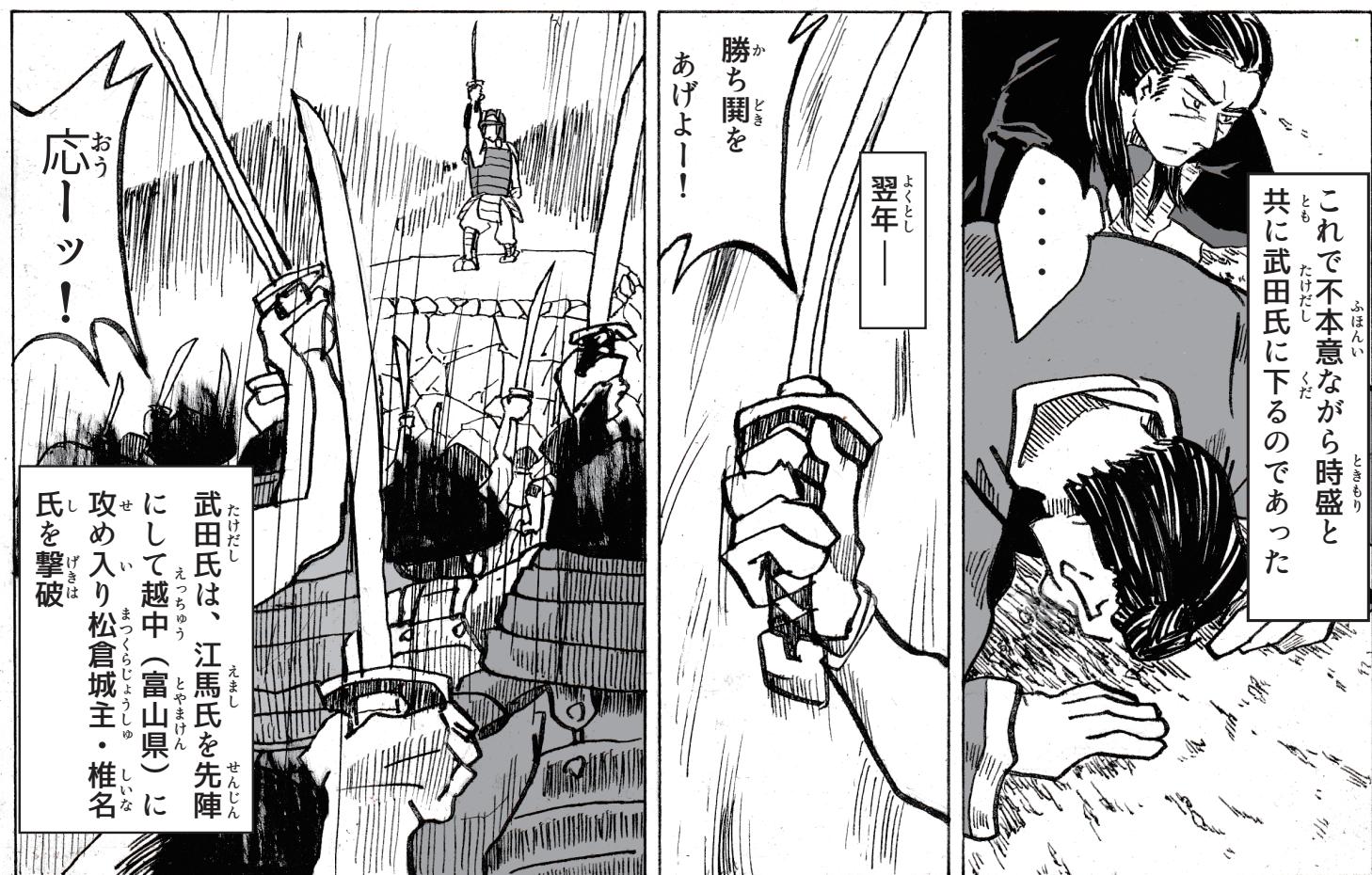
おだ のぶなが

織田信長



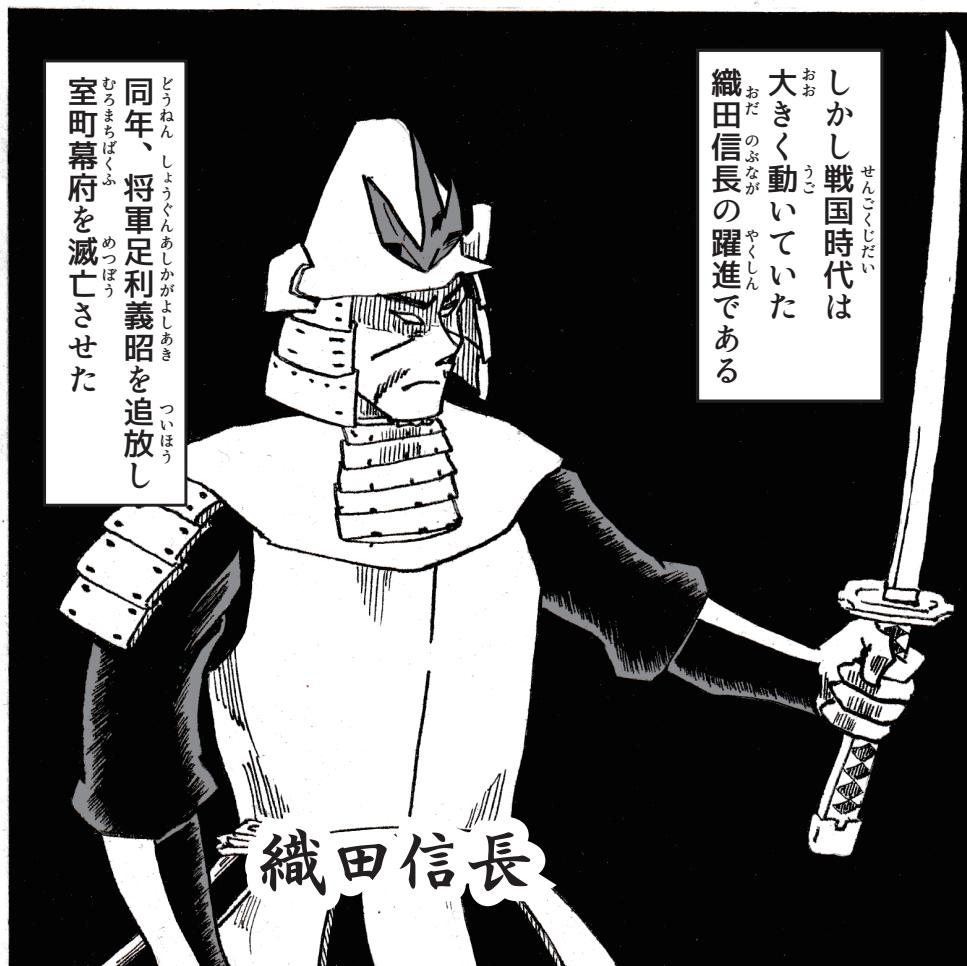


父・時盛は
武田派だつたが――



ところが、永禄七
(一五六四)年

これで不本意ながら時盛と共に武田氏に下るのであつた



天正三（一五七五）年、
ながじの長篠の戦いでは火縄銃を使い
むてき無敵と呼ばれた武田騎馬隊を圧倒

謙信公が亡くなつた今
けんしんこうな
織田方につかねば

三年後には上杉謙信も
さんねんごうえすぎけんしん
亡くなり信長を止める
のぶながと
ものが誰もいなくなつた

戦国時代において、小国の武将は
せんごくじだいしょうこくぶしょう
強い大名につくことで自分の領土
つよだいみょうのぶと
を守つていたが、輝盛はそのバラ
かんかくひじょうすゑ
ンス感覚が非常に優れていた

奴のことば絶対に
やつあとと認めぬぞ

ならん
もう我慢

しかし江馬家の存続の為
えまくそんぞくのため
といえ寝返りを繰り返
ねがえとさめり
す輝盛と父・時盛との言い争いは絶えなかつた

人質として武田に出された
ひとじちただ
二男・信盛は数々の功績を
じなんのぶもりかずかくこうせき
挙げる武将に成長していた

そうじゃ
信盛を
かえ
返してもらおう

兄上は嫡男で武勇にも
あにうえちやくなんぶゆう
優れておりますし
てきにんおも
適任だと思いますよ

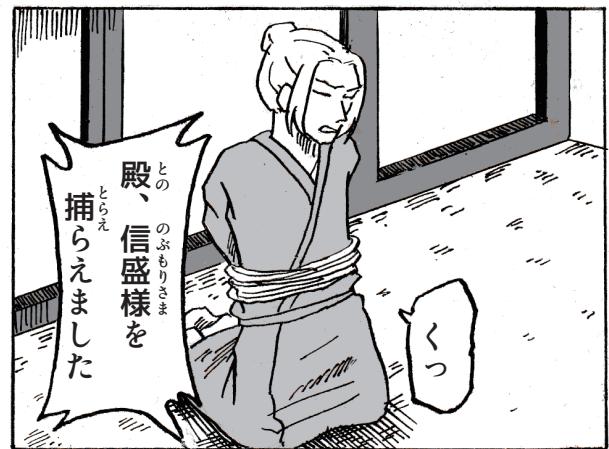
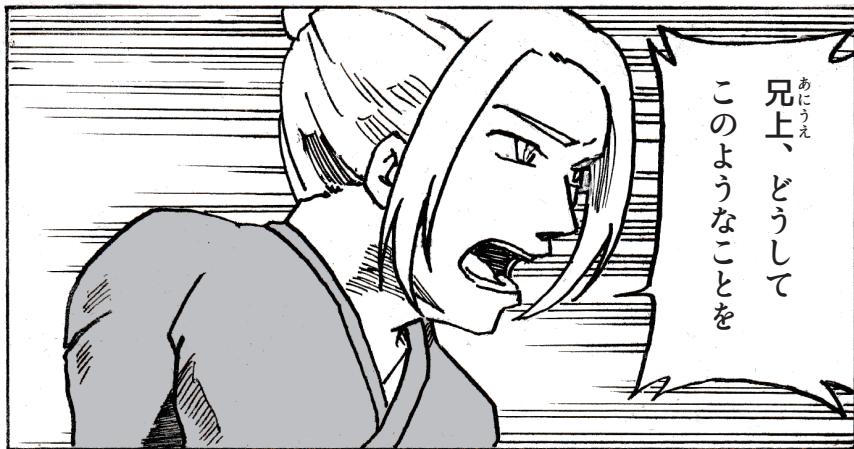
兄上に逆恨み
あにうえさかうら
されそだし

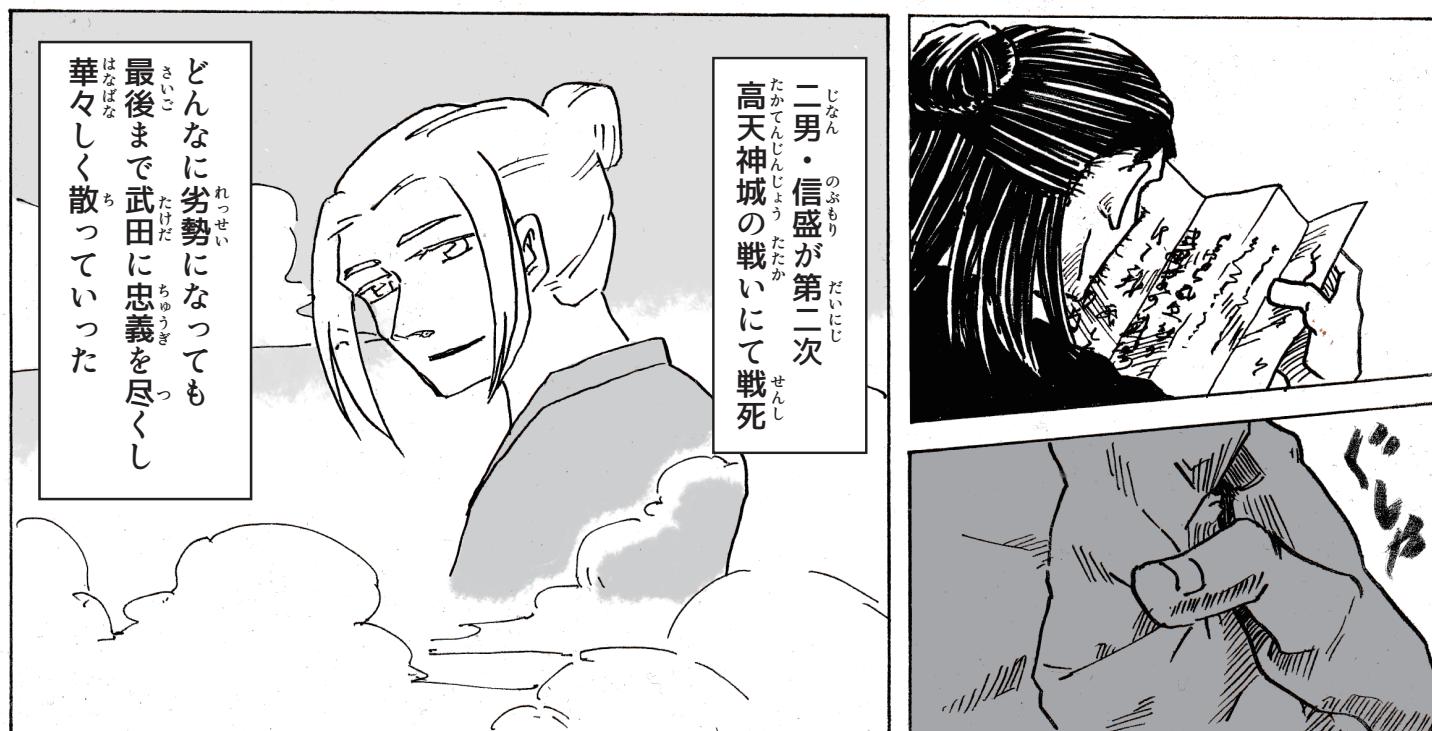
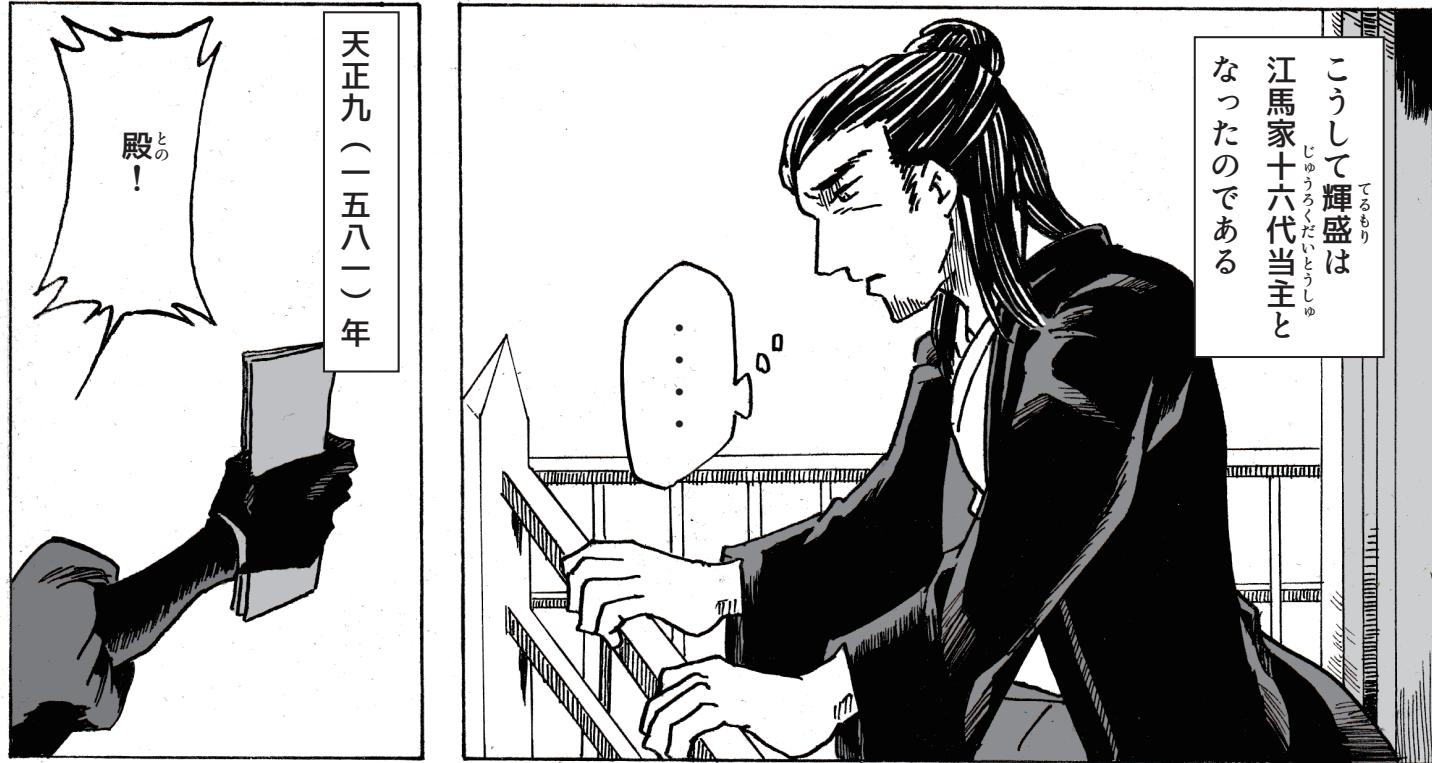
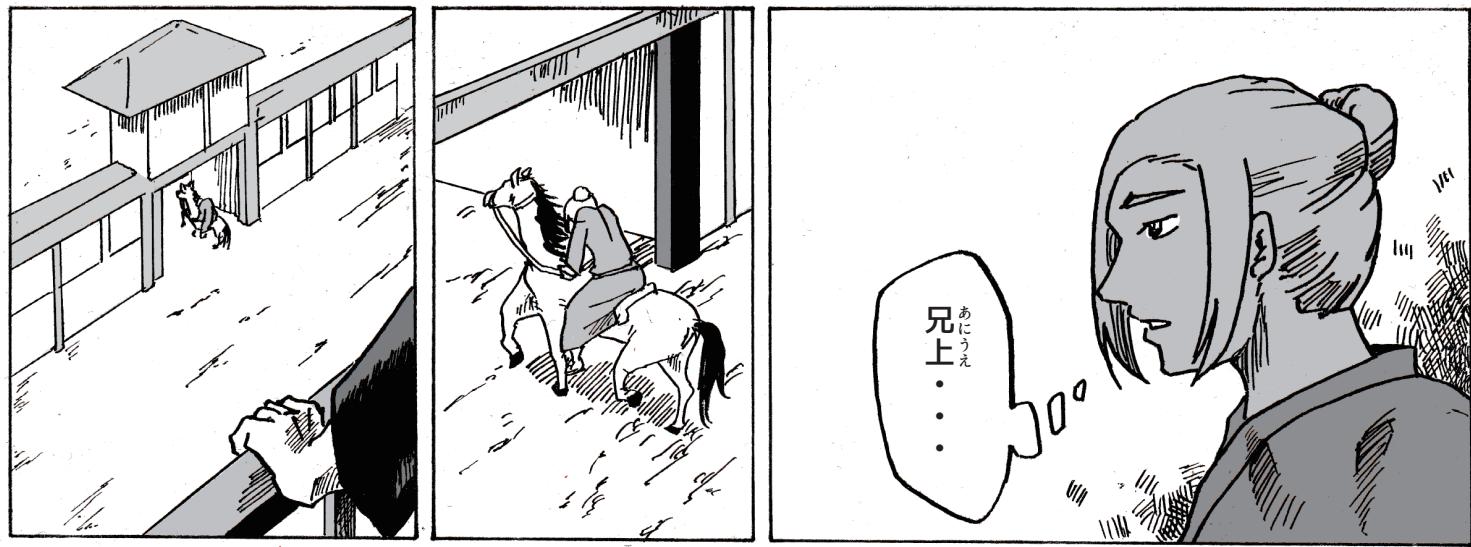
飛驒に呼びよせるが――

わたし
私は結構です

時盛の弟、麻生野直盛の子
よしもり おとうと あそや なおもり
慶盛に家督を譲ろうとするが







この時代、仁義だけでは
生きていけぬのじや！

三木自綱 (姉小路頼綱)

三木（姉小路）氏である
南飛騨を支配している
三木（姉小路）氏である

しかし飛騨の統一には
おおきな壁があつた

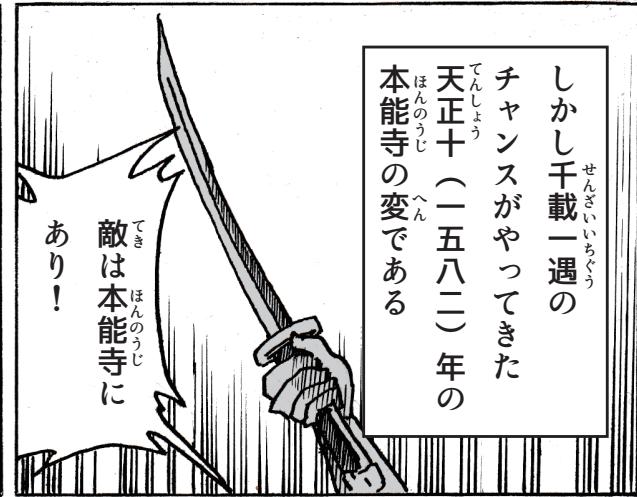
どんな手を使おうとも
必ず飛騨を統一してみせる

越中（富山）方面を中心
に領土を増やしていく
江馬氏に對して――

三木自綱は、織田信長と
同じく斎藤道三の娘を妻に
迎えたことで、相婿となり
信長との繋がりを強め、
勢力を拡大していたのだ

三木氏は、古川盆地を治めて
いた公家の姉小路家が分裂し
衰退したのに乘じて、姉小路
家の乗つ取りに成功





八日町 (高山市国府町)
ようちょう
たかやましのくふちょう
にて両雄が激突

この戦いは「八日町の
戦い」と呼ばれ、飛驒
統一を目指す江馬氏と
三木氏が激しく争つた
後に「飛驒の関ヶ原」
と称された

一進一退の
攻防が続く中

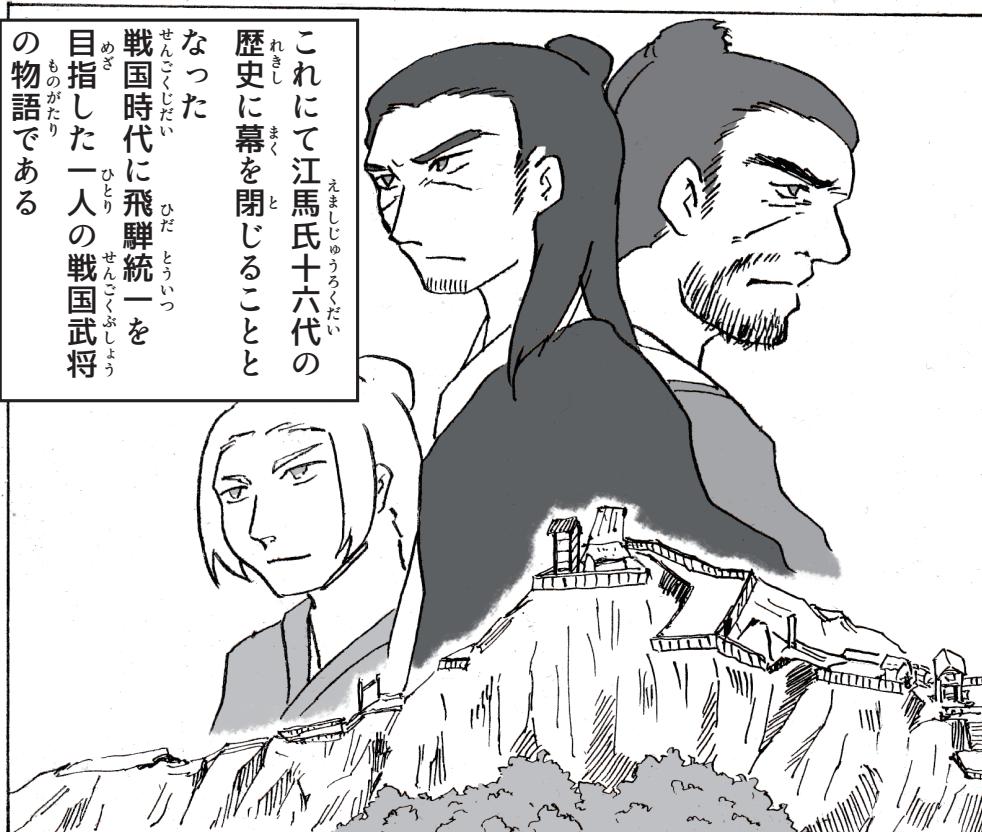
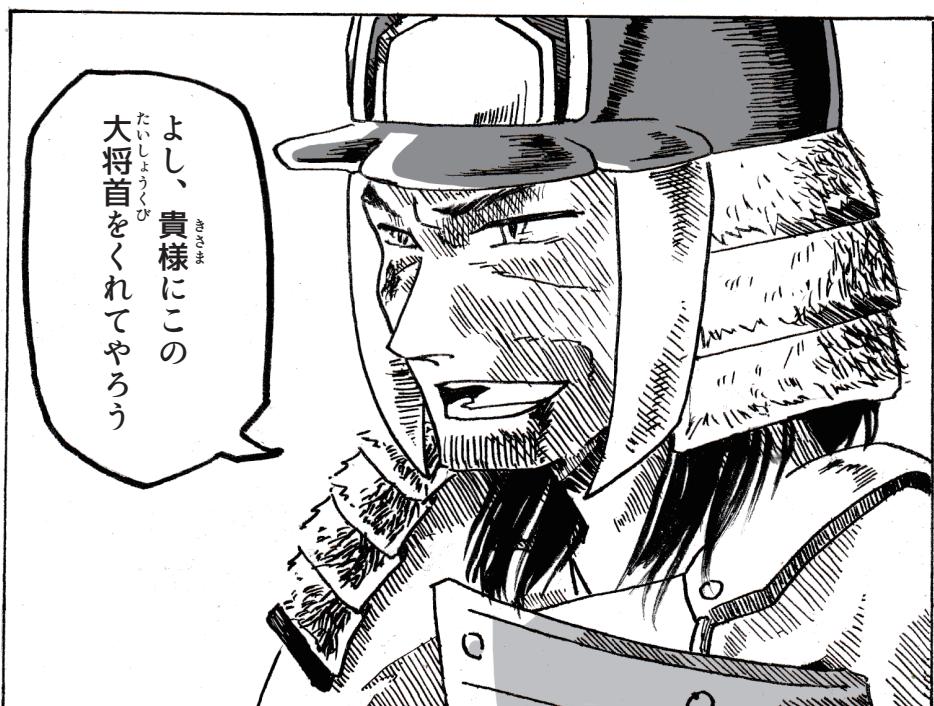
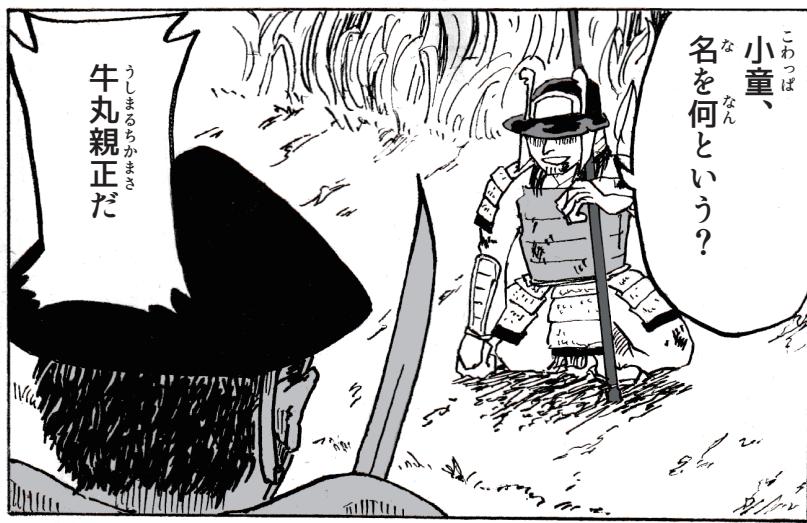
輝盛様に
続けー

もはや
これまでか…

全軍
たいきやく
退却ー

形勢が
一気に傾く

輝盛様が
撃たれたぞー



あとがき

「漫画『天地を翔ける』制作にあたって」

帰家 圭吾

と理解してもらうことは、将来的に非常に大切なことだと思います。

ただ自身の少年期を思い返しますと、恥ずかしながら活字は大の苦手で図書館では漫画ばかり読んでいました。そういうことも踏まえて、より多くの人に楽しんで読んでもらい、少しでも興味を持つてもらえるように漫画を制作させていただきました。

(二) 史実、伝承、物語について

一 漫画「天地を翔ける」について

(一) 漫画制作を始めるきっかけ

この度、漫画「天地を翔ける」を制作させていただきました。当初、江馬氏館跡庭園をもっと多くの人たちに知つてもらう為の利活用方法を検討する会議で、江馬氏の漫画を制作したらどうかと提案させていただきました。

というのも江馬館を訪れる方々は、①史跡巡りをしたり歴史研究調査をしたりしているような上級者、②日本史、特に戦国時代が好きな中級者、③歴史にあまり興味がないけど道の駅から近いから何となく訪れてみた初心者、の大きく三つに分けられると思います。予測ではありますが、来場者は③、②の順番に多く、①に至つては握りではないかと思います。上級者の方には、江馬館の魅力や価値などを充分理解していただけると思いますが、残りの方に理解してもらうことはとても難しいことです。

そこでNHKの大河ドラマのように、一人の戦国武将に焦点を当てて、その生涯をストーリー仕立てにして紹介することで、まずは江馬氏に興味を持つてもらいたい、その上で歴史的価値を説明することにより理解を深めてもらえるのではないかと考えました。また地元に住む子供たちに、自分の町のお殿様はこんな人だった

ですが、すぐに壁にぶつかることになりました。江馬輝盛は敗戦の将で史料が乏しく、史実として残っているのは、上杉・武田に分かれ父と対立したことや八日市の戦いで討ち死にしたことぐらいでした。「史実」とは、史料・歴史文書・定説と合意などから、歴史上の事実とされている事柄です。江馬氏に関する資料や文献はあるのですが、史実と認定されるのは難しく、あくまで伝承や物語という扱いになります。

かといって史実だけでは、味気のない作品になってしまいます。様々な文献や資料を参考に、歴史の本筋を外れないように注意しつつ、多くの人に楽しんでもらえるようなストーリー構成を学芸員に相談しながら考えました。異論やご指摘もあるかとは思いますが、江馬輝盛を主役とした物語として、ご覧いただければ幸いです。

(三) タイトル「天地を翔ける」について

江馬輝盛は、武田、上杉、織田などの戦国時代を代表する大名に囲まれながらも、情勢に応じて味方に付く相手を代えながら生き抜いて飛騨統一を目指しました。武田・上杉の両雄のイメージとして「天地」、飛騨の「飛」の文字から「飛翔」をイメージして「天地を翔ける」というタイトルを付けさせていただきました。

私自身、元々戦国時代が好きで企画したのですが、文献などを読む中で初めて知ることも多く、歴史を学ぶことの面白さを改めて体感できました。皆さまにも、漫画「天地を翔ける」を読んで江馬氏や郷土の歴史に少しでも興味を持つていただければ、これほど嬉しいことはございません。

結びに、漫画制作に関わってくださった皆様に感謝を申し上げて、あとがきとさせていただきます。

二 戦国あとがきうわさばなし

(一) 東町城跡(神岡城)

東町城は、作中に出てくる武田の家臣、山県昌景が越中侵攻の拠点として江馬氏に築かせたと言われています。現在の神岡城は、昭和四十五年に三井金属鉱業株式会社が神岡鉱業創業百周年を記念して、現存する石垣に模擬天守を建てたものです。

(二) 薪能「藤橋」

薪能「藤橋」は、江馬時盛と妻の明石が輝盛の策略により殺され、成仏できない明石の靈を一人の僧が夜通し経を読み成仏させ、明石が御礼に舞を披露するという江馬氏を舞台にした物語です。

(三) 江馬輝盛の墓と江馬殿切腹石

高山市国府町に安国寺の僧が建てたという輝盛のお墓があります。また輝盛の息子、江馬時政が父の死から三年後、金森長近の軍に参加し、三木氏を倒し父の仇を取りますが、領土を返してもらえませんでした。そのことに不満を抱き、一揆を起こしますが失敗し、父のお墓と同じ場所で切腹しました。その時に腰かけたという石があります。その石に触ると災いが起きるそうです。

(四) 十三墓峠(大坂峠)

八日市の戦いの後、江馬氏の重臣河上縫殿助など十三人の家臣が後を追つて死んだとされ、農民たちが靈を慰める為、お墓を建てたと言われています。

(五) 江馬貞盛の墓と犬石

作中には登場しませんが、江馬貞盛という輝盛の弟がいました。輝盛とは不仲で、殺害されるのを恐れ能登へ逃亡する最中に笈破地区にて凍死して墓が建てられました。その時、飼っていた愛犬が貞盛の死を悲しみ鳴き叫ぶうちに石になつたという犬石があります。その集落は犬石村と呼ばれ、その後、伊西村となつたといいます。

(六) 江馬氏と鉱山

神岡の鉱山は、輝盛の死後、金森長近の命令で茂住宗貞が採掘したという史料があり、鉱山と江馬氏の関係性を示す資料があります。しかし江馬氏は戦で多く兵を出したという記録もあり、それを賄う財力を考慮すると、すでに採掘をしていたのかもしれません。

(七) 金森重勝

高山藩二代目藩主の金森可重の側室で五男・重勝の母が江馬輝盛(または河上縫殿助)の娘という説があります。重勝は、父と共に大阪の陣に出陣し、その後、高原郷三千石を分与され、旧神岡工業高校の敷地内にお屋敷があつたそうです。もしそうなら孫の代で、念願の高原郷に戻つてこれたことになります。

【参考文献】

神岡のむかし話

川口半平『濃飛戦国武将伝』

江馬三枝子『飛騨の民話』
葛谷鮎彦『中世江馬の研究』